

5. 危険な水辺の動植物

野生の大型動物に出会った時の対処法

山間部では、たまにイノシシや鹿、時にはクマなどの野生動物に出くわすことがある。遭遇したらあわてず騒がず、動物を刺激しないように静かにゆっくりと立ち去るようする。食べ物を持っている時はリュックごと置いて逃げるのがよい。決してあわてて走って逃げない(ただし、坂道でクマに出会った時には、クマは前足が短いので坂を下るのが下手なので坂下へ走って逃げた方がよい。)こうした野生の大型動物には出会わないに越したことはないので、事前に地元の人から情報を得るようする。

虫に刺されたら

自然の中でもっとも多く起きるトラブルが、蚊やアブ、ブヨ、ハチなどによる虫刺されである。特に早朝と、夕方から夜にかけて時間帯が要注意。その間だけでも帽子に長袖、長ズボンといった肌を出さない服装(黒い色は避ける)をし、なおかつ防虫スプレーや蚊取り線香で防御するようにする。もし、毒虫に刺されてしまったら、患部を水で洗い流し、抗ヒスタミン系の薬を塗って冷やす。かゆくても決して患部をかかないこと。

スズメバチに襲われた場合

毒虫の中でとくに危ないのがスズメバチで、時には刺された人が死ぬこともある。黒くて動くものには集団でしつこく襲ってくるので、つきまとわれてもなるべく騒がず、腹這いになってじっと動かないようにする。決して手などで払うような行為はしない。また、刺されやすい人は、香水や匂いのするものは体や髪の毛に付けないようにする。ジュースなどの飲みかけの缶やフルーツなどを近くに置かないようにする。もし刺されたら、ポイズンリムーバーととげ抜きなどを使って毒針と毒液を取り除き、患部を冷やしてすぐに病院へ行く。

アナフィラキシー・ショックに注意

スズメバチに限らずハチの毒が怖いのは、人間の体がハチの毒に対して強力なアレルギー反応を引き起こすことである。特に数か月以内に1度ハチに刺されたことがある場合には注意が必要。体内にはすでにハチ毒に対する抗体ができており、再びハチに刺されると強烈なアレルギー症状が起き、ショック死してしまうこともある。アレルギー体質の人は特にハチには注意することが大切。



かぶれに注意

気が付かないうちにウルシ科のヤマウルシ、ヤマハゼ、ヌルデといった木々に触ってしまい、かぶれてしまうことがある。また、蝶やガなどの鱗粉でもかぶれてしまう人もいる。注意が肝心だが、もしかぶれてしまったら、患部に触れないようにして、できるだけ早く皮膚科の専門医の診察を受ける。

生半可な知恵で野草やキノコに手を出さない

野草やキノコの中には毒を持つものも多い。トリカブトやツキヨタケなどを誤食した例は毎年のように報告されている。図鑑やガイドブックを見ただけでは、素人が見分けるのは難しいので、とにかく怪しいものには手を出さない方が無難。

口に入るすべての物に気を付ける

実際に食べる物以外にも、口に入れる物には気を付ける。キャンプでの食事の際に、近くに生えている本の枝などで箸やバーベキュー用の串を作ったりすることがあるかもしれないが、それがどんな植物なのかきちんと理解したうえで使用すること。以前イギリスでは、強心作用のある成分を含有するキョウチクトウの枝でバーベキュー用の串を作ったキャンパーが、心臓麻痺を起こして死亡した例もある。

思い込みは禁物

「こんな所にこんな生物がいるわけない」といった思い込みは禁物である。平成11年、江戸川の河川敷ではそれまでいなかったマムシが出没するようになり、注意を促す看板が立てられた。どうやら前年の平成10年9月に利根川が太増水した際に上流から流されてきたらしい。また、同じくヘビのヤマカガシは、昭和59年に中学生が噛まれて死亡したことから、毒ヘビであることが分かったが、以前は毒がないと思われていたため、いまだに毒へどではないと思込んでいる人も多い。

未知の生物にも用心

以前は日本にはいなかったセアカゴケグモやハイイロゴケグモといった毒グモが、近年、横浜や愛知、大阪などで相次いで発見されている。また、ペットとして飼われていた爬虫類などが逃げ出したり、捨てられたりして住宅地や河川敷などで発見されるといったニュースも最近では珍しくない。ワニガメなどは子どもの指など簡単に食いちぎってしまうという。とにかく見慣れない生き物がいたら手を出さないようにすることが大切である。

